

のらぼう菜から生まれた新品種野菜 「かわさきつや菜」の誕生



経済労働局都市農業振興センター農業技術支援センター 課長補佐 古山 和弘

1 「のらぼう菜」から 新品種誕生までの経過

(1) 「のらぼう菜」とは

「洋種ナバナ」(アブラナ科)に属し、川崎市多摩区の菅地区で古くから自家用に栽培されている野菜で花らいおよび茎葉を食用とする。形は「ナバナ」に似ているが苦みが無く、甘みの強い点が特徴である。

(2) 川崎市における「のらぼう菜」

菅地区で細々と栽培されていた「のらぼう菜」が再び注目されるようになったのは、平成13(2001)年に多摩区菅地区で『菅のらぼう保存会』が発足してからである。野菜の収穫物が少ない冬季に収穫でき、くせのない甘い葉物である「のらぼう菜」は、川崎市の農産物ブランドや神奈川県のかながわブランドに登録され、直売用の野菜として市内全域で認知度が高まった(延作付面積329a市内25位、収穫量13,215kg市内26位^(注1))。



のらぼう菜(販売形態)

(3) 「のらぼう菜」栽培 川崎市の取り組み

①特性調査の開始

農業技術支援センターでは平成15年度～平成18年度、10軒の農家から15系統の種を預かり、収穫時期や収量等の特性調査を行った。調査の結果、収穫時期別に収穫量や見た目等を基準に、優良系統を4点選定した。

②共同研究の開催

平成27年度～平成29年度の3カ年にわたり神奈川県、明治大学、川崎市の3者が共同研究を行い、高品質なのらぼう菜の栽培法を確立した。

(4) 新品種の発見

①新品種の発見

平成18年度に特性調査のため、多くの「のらぼう菜」を栽培していたところ、これまでと違い、葉や茎に光沢のある個体を偶然発見した。

②新品種の誕生

葉や茎に光沢のある個体から種を採取し、実際に種まきして苗を栽培したところ、すべて光沢のあるものであった。このことから、遺伝的に固定されている系統だと判明した。



左「川崎市農技1号」 右「のらぼう菜」

2 新品種の育種

(1) 新品種の誕生

①新品種の特徴(発見当初)

収穫時期は中生で葉や茎に光沢があり、分枝数が少なく、茎が細いため、収穫量は通常系統の7割程度しかなかった。

②技術職員(農業職など)による育種

平成19年度から7人の担当者が新品種の栽培試験に取り組み、集団選抜による育種を開始した。

③「川崎市農技1号」の誕生

10年間の優良系統の集団選抜により、光沢があり緑が鮮やかで分枝数が多く、収穫量が通常系統と差のないものを選抜することに成功し、これを「川崎市農技1号」と命名した。

(2) 品種登録までの経過

①品種登録

共同研究などで付き合いのあった大学教授等の薦めもあり、品種登録を行い農業振興に役立てることに決まった。

②品種登録願の出願

勤務発明届の提出、職務発明審査会の開催を経て、平成29(2017)年3月31日、「川崎市農技1号」をナバナの新品種として、農林水産省食料産業局知的財産課にて品種登録願を出願した。



品種登録証

③品種登録の決定

国での栽培試験等を受け、平成31(2019)年2月14日付で品種登録が決定した。

④市長記者会見

同年3月8日の市長記者会見において、「のらぼう菜」から誕生した新品種「川崎市農技1号」が県内市町村で初、川崎市で品種登録第1号になったことを報告した。

そこで、これらの課題の解決の切り札として、「かわさきつや菜」を活用したいと考えている。

現在準備を進めている愛称やロゴの発表や販促品の配布によるPRにより、川崎生まれの野菜であることをアピールし、地域特産物化することで、「かわさきつや菜」と「のらぼう菜」両方の知名度を上げていきたいと考える。

「かわさきつや菜」は「のらぼう菜」から生まれた新品種であることから、「のらぼう菜」に関係する全体が注目され、将来的に「のらぼう菜」のブランド力を向上させたいと思っている。

まだ、新たな取り組みは、始まったばかりである。これから農業者だけではなく多様な主体と連携し、川崎市で生産される農産物の付加価値を向上させ、都市農業の特徴を活かしたさまざまな施策を推進するとともに、「のらぼう菜」の優良系統を農業者から譲り受けるなどして優良系統の保存と維持にも尽力したいと考えている。

5 おわりに

振り返れば、新品種の発見は普段何気ない作業の中での出来事だった。農業技術支援センターの野菜ほ場で変わった系統の「のらぼう菜」を見つけ、直感的に種を採ったら面白いと思い、現場担当者に指示したことが、現在につながっている。

今回の発見による品種登録は、技術職員(農業職等)の後輩達らの努力により達成されたものである。共同研究により、可能性を発見し、品種登録や愛称・ロゴを決めて商標登録を目指すことに決めたのは彼らである。そしてなによりも、先の見えない試験を地道に継続し、長年に渡り同じ作業を忍耐強く繰り返すことで結果を出してもらえた事に心から感謝する。

結局、品種登録するまでの10年間で総勢7名の担当職員が携わり「かわさきつや菜」が完成した。技術職員は少数だが、目標に向かって同じ方向を向き、協力して長い年月をかけ、タスキをつなぎながら仕事をする事が出来る事が素晴らしいところであり、今回の品種登録で少しでも注目されて良かったと思う。

私はこれからも川崎の農業に携わり、少しでも役立つ事が出来れば幸いである。

3 愛称・ロゴの決定

(1) 「川崎市農技1号」の愛称・ロゴの募集

郷土野菜として広く市民の方に親んでもらうため、令和2(2020)年2月1日から4月30日まで愛称とロゴの募集を行った。

(2) 応募結果と愛称・ロゴの決定

応募は川崎市だけでなく、全国から愛称1,096点、ロゴ155点の応募があった。令和2年12月に学識経験者等による選考会を開催し、愛称・ロゴを決定した。愛称は「かわさきつや菜」に決まった。今後、広く周知を行っていく予定である。

4 今後の展望

「のらぼう菜」は、自家種で栽培されており、品質にばらつきができるため、味に当たり外れができてしまう。また、近年、農業者の高齢化により、優良系統の種子の維持が難しくなっている。

(注1) 川崎市農業実態調査 平成29年度版